白梅学園大学・短期大学　教育・福祉研究センター研究年報　№23　17～29（2018）

論文

『練習の精神』における「放下」を軸としたボルノー教育人間学における「身体性」の契機についての一考察

A Study on a Moment of “Physicality” in Bollnow’s Pedagogical Anthropology Centering on “*die Gelassenheit*” in *Vom Geist des Übens*

井上　遥*

序章　「放下」と「住まうこと」の関連性から見出すボルノー教育人間学における「身体性」の契機について

第一節　ボルノーの「人間」理解としての「身体性」の契機について

井上（2018）[1]によれば、ボルノーの「空間論」である『人間と空間』（*Mensch und Raum*）を「身体論」として捉えることによって、ボルノーが『人間と空間』において提起した「住まうこと」とは、「身体に住まうこと」を意味することであり、その結果「住まうこと」の根幹には「身体性」の契機が存在することが明らかとなる。すなわち、ボルノーにとって「身体」とは、「媒体」として「空間」と不可分に「合一」し重なり合うものとして存在することによって、人間にこの世界に「住まうこと」を可能にするものであるということである。『人間と空間』でボルノーは、「身体」を「空間を経験している主体」かつ「体験されている客体」とした上で“「主」「客」が密接に関連しあっているもの”として定義し、「人間」と「身体」の関係性を、「所有する者」としての「主」と「所有されるモノ」としての「客」が分化した関係に回収されないものであると指摘する。これをボルノーは「身体に住まう」ということの性質を表すものとして提起し、「受肉」の概念によって、「身体」と「人間」の「それ以上にさかのぼることのできない統一」として定義されるものであると指摘する。ここからボルノーは、「人間が空間に住まう」ということは「人間が空間において受肉している」ということと同義であるとして、「受肉」の概念を「人間」と「空間」の関係性を言い表す概念としても提起する。

またボルノーは『人間と空間』において、メルロ＝ポンティに依拠して「住まうこと」とは何かを探究する中で、「住まうこと」が可能となるためには、「人間が身体に受肉する」（「心が身体に住まう」）ことが必要不可欠であり、「身体」とは「心」が「住まう」ための「郷土空間」であり、それ故に「身体」と「心」の関係性とは、「人間」が「空間」に対して取り持つ「わかちがたい統一」の「母型」となると指摘する。このことから、ボルノーにとって「人間」とは、「身体」という「一つの空間」を基盤としてはじめて、“「身体」を含めた「場」そのものである「より大きな包括的空間」のなかへ埋めこまれること（住まうこと）が可能となる存在”であることが明らかとなる。

以上の考察を経て、ボルノーの人間理解の根底には「身体性」の契機が存在していることが明らかとなったが、ここからは同時に、“ボルノーの「身体」理解”とは、“ボルノーの「人間」理解”であること（につながること）であるということを明らかにするための鍵が、“ボルノーにとって「身

＊白梅学園大学・短期大学　実習指導センター

体」と「心」の関係性が如何なるものとして捉えられているのか”ということを明らかにすることである、ということが課題として浮かび上がってきた。本稿は、この課題の究明を第一の目的とするものである。そのために、具体的題材として用いるのが、『練習の精神』（*Vom Geist des Übens*）である。

この『練習の精神』は、一見すると「身体」を主軸として、練習（稽古）における人間のあり方についての議論が行われているボルノーの「身体論」であるかのように見受けられるが、実際は、練習（稽古）という身体的行為を通した、人間が到達すべき（本来あるべき）心のあり方の解明が主題となっていることがわかる。このことから『練習の精神』とは、「身体」に宿る「心」の問題や、「身体」と「心」の関係性、“「身体」に「住まう」”という「心」のあり方についての論考であり、いわば、「身体」を介して「心」の充実の状態を、ひいては、「身体」と「心」が「心身一如」の状態で結びつき、人間がこの世界に「住まうこと」が可能となった状態を、「放下（Die Gelassenheit）」の概念を軸にして解き明かそうとしたものであると言える。

さらに注目すべきことは、ボルノーが、この“「身体」と「心」が「心身一如」の状態で結びつき、人間がこの世界に「住まうこと」が可能となった状態”を、日本古来の武道である弓道の稽古を具体的な題材にして明らかにしようとしていることである。この弓道の稽古についてボルノーは、ドイツの哲学者オイゲン・ヘリゲル（Eugen Herrigel）（1884-1955）が大正末期から昭和初期（1924-1929）に東北帝国大学講師として招聘され来日した際に、仙台の弓術師範であった阿波研造範士（1880-1939）の道場に入門し、そこで自身が経験した弓道の稽古における心身のあり方について記したテクストを基にして、稽古者（練習者）が稽古の末に至る“境地”として「放下」を提示する。本稿では、『練習の精神』における記述から、この「放下」を、ボルノーが“「身体」と「心」が「心身一如」の状態で結びつき、人間がこの世界に「住まうこと」が可能となった状態”に至ったものとして捉えていることを明らかにする。

すなわち本稿の課題とは、『練習の精神』における「放下」の概念を軸にして、この『練習の精神』において提示された「放下」とは如何なる概念であるのかを、『人間と空間』における「身体に住まうこと」との関連の中で捉えることによって、ボルノー教育人間学における「身体性」の契機について明らかにする中で、ボルノーが「放下」という概念において捉えた“「身体」と「心」の関係性”とは如何なるものであるのかについて解き明かす。これらを踏まえて、ボルノーにとって「人間」とは如何なる存在であると捉えられているのかを明らかにすることを目指す。

第二節　『練習の精神』を手がかりとして「身体に住まう」ことと「放下」の間に関連性を見出すことの意味について

それでは何故『練習の精神』に示された「放下」の概念を手がかりにして、“ボルノー教育人間学において、「身体」と「心」の関係性が如何なるものとして捉えられているか”ということを解き明かすことを通して、“ボルノーにとって「人間」とは如何なる存在であると捉えられているのか”を明らかにしようとするのか。

『練習の精神』とは、ボルノーが教育学的立場から「練習（稽古）」を題材として、西洋の（教育学的）伝統において「練習」という営みが軽視されてきたことに着目し、「練習」こそが人間が“真の本質”に至るための重要な契機となり得るということを提起した、いわばボルノーの「練習（稽古）論」として捉えられるものである。すなわちボルノーにとって「練習」とは、“退屈で厄介な重荷”ではなく、その行為に“忘我的に没頭する”ことによって、「内的自由」への道を獲得することができるものであり、「散漫な日常的自我の克服」と「本来的で真の生活への突破」を可能にするものである[2]。このような意味で『練習

の精神』とは、ボルノーにとって「特に重要な小著」[3]として認識されるものであり、「教授学的な展望を越えて、一つのより一般的な哲学的な関心を必要とする」[4]ものである。

ボルノーは『練習の精神』において、現代の教育学において「練習」が軽視されている現状を鑑みて、このような潮流に対して「練習」とは「人間の真の生活」である「内的自由」へと「自己自身の努力によって到達できる唯一の道」であると提起する[5]。その中でボルノーは、「人間はただ練習によってのみ、その生活の完全な発展と充実に至る」のであり、「練習」とは、「それ自体の中に既に生活のそれ以上はあり得ないような充実を意味」するものであるとして、「練習」が人間の生にとって必要不可欠なものであると指摘する[6]。このことをボルノーは、「人間は練習する場合にのみ全くの人間である」[7]という言葉や、「人間はもはや練習することに努力しない場合には、彼の人間存在以下に落ち込んでしまう」[8]という言葉で表現する。

またボルノーはこの書を自身の著作の中でも、日本（東洋）的な思想の影響を受けて記した著作に分類されるもの（「日本の子どもたち」[9]）として認識し、「人間は我を忘れて自分の修練に専念する時に、自分の小さな自己にとらわれて絶えず心配ばかりしている日常生活から開放され、ふだんは隠されているより深い自我への入口にたどりつくのだという根本思想は、何といっても日本的な表象によって強く影響されているのです」[10]として、日本的な表象（弓道の稽古や、その稽古を支える禅的思想）を通して、人間がいわば“真なる自己（本質）”に至るための“道”として、「練習」の意義を提起している。これに関しては序章第一節でも触れたように、ボルノーが「練習」とは人間にその本質へと至るための内的変化を促す契機であるということを指し示す具体的題材として、ヘリゲルの弓道の稽古についての著作を用いているところにも表れている[11]。

『練習の精神』を主題とした先行研究については、ボルノーが「Übung」という概念で捉えようとした日本の「稽古」の把握の不十分さ（ドイツ・西洋の思想によって、東洋的稽古の思想を捉えることの不可能性）を指摘した桐田（1985）[12]、教育における教授法や教育方法論的視点から『練習の精神』において提示される「放下」や「内的自由」の概念を手がかりにして、「従来消極的にしか把捉されていなかった『練習』という営みについて教育学的に再考し、本来の『練習』の積極的で正しい教育的意義を浮かび上がらせること」を目的として子ども（人間）にとっての「練習」の重要性を指摘した広岡（2010）[13]、“「道徳性の発達」と「行為の練習」の関連性について検討する”という課題にあたるための具体的題材としてボルノーの『練習の精神』を用いて、ペスタロッチーの“「道徳的基礎陶冶」における「道徳的行為の練習」”が成立するためには「練習」という営みにおける「身体」へのアプローチが鍵となることを指摘した光田（2013）[14]などがある。

その中でも重要なものが、井谷信彦の研究である[15]。井谷は“「内面の自由」という目的のための手段として稽古を捉えると、却って「内面の自由」への道を立て塞いでしまう”という桐田の論を踏まえながら、『練習の精神』に提起されている「放下」とは如何なる概念であるのかについて明らかにしようとする。この「放下」について井谷は、『練習の精神』においてボルノーが「『正しい生活』あるいは『内面の自由』の基調をなしている、我意を手放した『放下』という『心の状態』」として定義しているとした上で、ボルノーが「『放下』という心の状態とは、人間を取り巻いている環境と衝突しかねない『我意』や『我欲』を『手放した』状態」であると指摘していることに着目する。その上でボルノーが『練習の精神』において、弓術の稽古に関するヘリゲルの叙述を基にして、“無欲と無我の境地”に関わる洞察として、“「内面の自由」と「放下」との関係（関連性）”を解き明かそうとしていることに注目して、ボルノーが「放下」を“純粋な「直観」を獲得するための

前提条件”であり、“「直観」とは「実用上の取り扱いのような単純な図式主義に邪魔されることなく、現実性の充実を受け止めること」”であり、“「有用性の志向の制約から解き放たれて、諸事物を固有の存在において」捉えること”であって、“純粋な「直観」を獲得するために要求されるのが、「我意を離れ去って、信頼を抱きながら、干渉してくる出来事へと身を委ねた」「放下」という状態”であると定義していると指摘する。

本稿では井谷が指摘したように、「放下」を『練習の精神』においてボルノーが指摘しようとした“人間の本来性”や“真なる人間の姿”を指し示す概念として捉えた上で、この「放下」を「身体」を軸にした“人間の本質”を捉えることを可能にする概念として着目する。その上で、『練習の精神』における「放下」の概念を軸にして“ボルノー教育人間学における「身体性」の契機を明らかにすることによって、ボルノーにとって「人間」とは如何なる存在であるのか”ということと、“ボルノーの「身体」理解とは、ボルノーの「人間」理解であること（につながること）である”ということの解明を目指す。この試みは、前掲の井上（2018）において明らかとなった、“「住まうこと」とは「身体に住まう」ということに他ならず、「住まうこと」の根幹には「身体性」の契機が存在する”ということと密接な関連を持つことである。これに関して、ボルノー自身が「住まうこと」との関連性の中で「身体」が重要な概念であることを指摘している[16]ことからも、ボルノーの「身体」理解とは、ボルノーの「人間」理解の根幹を貫くものであることへの示唆が読み取れる。

以上のことを踏まえ、本稿の流れは以下の通りとなる。まず第一章において、「放下」とは如何なる概念であるのかについて確認する。第一節で「時間に住まう」こととの関わりの中でこの概念が構築された『時へのかかわり』におけるボルノーの「放下」定義を概観する。これを踏まえて第二節で、『練習の精神』において「放下」の概念が、練習者（稽古者）が練習（稽古）の末に至る“境地”として提示されていることについて辿る中で、「放下」が人間の「身体」と「心」における、いわば“充実”の状態として提示されていることを明らかにする。第二章第一節では、『練習の精神』においてボルノーが、「心身一如」の状態として「放下」の概念を提起していることを明らかにする。これを踏まえて第二節では、『人間と空間』における「身体に住まう」ことと『練習の精神』における「放下」の関連性について解き明かす。これらを踏まえて、「身体」と「心」が密接に結びついた人間の充実の状態として「放下」を提示することによって“ボルノーの教育人間学において「身体」と「心」の関係性が如何なるものとして捉えられているか”ということを明らかにする中で、“ボルノーにとって「人間」とは如何なる存在であるのか”を明らかにする。

第一章　ボルノーの思想における「放下」の意義について

第一節　『時へのかかわり』における「放下」の定義について

ボルノーは彼の「時間論」である『時へのかかわり』（*Das Verhältnis zur Zeit*）において、「空間論」である『人間と空間』で提起した「住まうこと」に「時間」の側面からアプローチする。「流れさるもの」、「消滅するもの」としての「時間」に、人間は如何に「住まう」ことができるのか。この問いに答えるためにボルノーが提示するのが、キリスト教神秘主義思想に由来する「放下（die Gelassenheit）」[17]の概念である。ボルノーはこの「放下」を、“いま、この瞬間”という「体験された時間（die erlebte Zeit）」[18]を生きる人間の様相として提起する。

「体験された時間」とは、「客観的な時間（die objective Zeit）」[19]と対置されるものである。日常生活において体験される“流れさるもの”としての時間である「客観的な時間」に対して、「体験された時間」において人間は、“絶えず流れさる時間の中で生きる”という、自身が有する「無

常性」を打破するとボルノーは指摘する。これと関わって重要になるのが、「（現在の）瞬間（der gegenwärtige Augenblick）」[20]ということであり、「永遠（die Ewigkeit）」[21]ということである。先述したように“人間”とは、“絶えず流れさる時間の中で生きる存在”であり、その意味で“「無常性」を有する存在”である。しかしながら、この「無常の思想を根拠のないものとして拒否する」[22]答えが存在するとボルノーは指摘する。それが、一つは“「現在の瞬間」を大切にするという構え”であり、これは“「消滅する時間にたいする対立概念」であり、「時間性の克服」を可能にする「永遠」の概念”である。ここでボルノーは、“「現在の瞬間」を大切にすること”という構えによって未来に煩わされることなく“いま、ここにあること”に専心することが人間の生にとって重要であると指摘し、その構えを支える拠り所として「永遠」の概念を提示する。ここからボルノーが、“人間の日常的な生において、ただひたすらに瞬間を生きること”の重要性を示唆していること、そしてその“瞬間を生きること”の中に人間存在の「永遠性」を見ていることが明らかとなる。すなわち「放下」とは、“いま、ここ”に没頭し“瞬間を生きる”という人間存在の有する時間における「永遠性」を指し示す概念である。この点に関してボルノーは、「まったく瞬間に没頭する者、たとえば自分を内部から衝きうごかす出来事によってすっかり心奪われてしまうような者に、自分の未来に生ずる義務のことを想いおこすように要求することはできない」[23]として、未来に煩わされず、現在を生き、いまこの瞬間に没頭することが人間の生にとって重要であることを指摘する[24]。

これらのことからボルノーが「放下」の概念によって捉えようとした「時間に住まうこと」とは、未来に煩わされることなく“いま、ここ”に存在することを十二分に享受するというあり方を時間的側面から捉えるものであることが明らかとなる。時間に対する「放下」という構えが、人間にこの世界に「住まうこと」を可能にするとボルノーは提起しているのである。

第二節　『練習の精神』における（練習者の“境地”としての）「放下」について

それではボルノーは、『練習の精神』において「放下」を如何なる概念として描き出しているのか。ボルノーはここで「放下」を、練習者（稽古者）がその練習（稽古）の果てに辿りつく“境地”に至った人間の状態として提起し、「内的自由（die innere Freiheit）」[25]との関連性の中で捉える。この中でボルノーは、日本における武道（弓道）の稽古について自身の体験を記したヘリゲルのテクストや、カールフリート・デュルクハイム（Karlfried Graf Dürckheim）（1896-1988）の武道をはじめとする禅思想に基づく東洋的身体論についてのテクストを手がかりに、日本古来の武道の稽古における人間のあり方から、「放下」とは如何なる概念であるのか、「放下」に至った人間とは如何なる存在としてこの世界にたちあらわれるのか探究する[26]。

ボルノーにとって「練習」とは、「練習されるべき行為への忘我的没頭、行為を出来るだけ良くし、そしてあらゆる繰り返しの際に前回よりもより良くするという弛まぬ意欲を要求する」[27]ものであり、「全身全霊をあげての緊張を必要とする」[28]ものである。それ故にいわば“正しい”状態で練習に臨む人間（「放心したり不注意である」[29]状態になく、「それから解放され得ない非常な悲嘆に暮れている」[30]状態になく、「来るべき出来事への期待に心を震わせている」状態になく、たとえば「学校でその過度な要求を心の中で拒否している退屈な練習への外的強制によって押さえられている場合」[31]にあるのではない人間）は、必然的に“練習する”というプロセスの中で「全く彼の行為に没頭して、そのリズムによって自らを運ばせ」[32]ることが可能となることによって、「現在の瞬間に安らっていて、そして自らを確信しているが故に、練習においてもまた必要な時間をかけることが出来る」[33]という「放下」の状態に至る。

これを踏まえてボルノーは、日本の武道における「練習（稽古）」において、練習者（稽古者）が「完成された練習（der vollender Üben）」[34]において至る状態として「無我（die Ichlosigkeit）」[35]の概念を挙げ、この「無我」との関わりの中で「放下」について論じている。ここでボルノーは「練習」を、“人間に「最内奥の核心で捉えるラディカルな変化」[36]を可能にする契機”と定義し、「練習すること」によって、「人間は誤ったものとして認識された彼の日常の現存在から、彼の真の本質へと戻される」[37]と指摘する。これに基づきボルノーは、「無我」を「徹底的な練習において達成された一層より高次の現存在形式」[38]として提起する。これはどういうことか。

まずボルノーは「無我」を、「安らぎ、心を乱されない明朗の状態、放下の状態、あるいは確実な自己自身に安らう状態」[39]として定義する。これを踏まえて、ヘリゲルやデュルクハイムの言葉に依拠しながら、「無我」の状態が、“身体的にも心的にも「解き放たれていること」”を指し示すことであると指摘する[40]。ボルノーはこの「解き放たれていること」について、「注意を集中した落ち着いた行為であって、痙攣することなく、性急に未来へ殺到することなく、全く現在の行為に同化している」[41]状態であると定義する。このことからボルノーは、「解き放たれている」という状態を、「注意を集中した解き放たれ（eine gesammelt Gelöstheit）」[42]や「解き放たれた集中（eine gelöst Sammlung）」[43]という言葉で指摘する。

以上のことを踏まえてボルノーは、ヴィルヘルム・カムラー（Wilhelm Kamlah）（1905-1976）の哲学的人間学における「根本経験（eine Grunderfahrung）」[44]という概念を手がかりにして、「解き放たれている」という人間の状態を、「内的自由」の概念と同質性を有したものとして提起する。ここでボルノーはカムラーの「根本経験」を、「諸経験の秩序の中で抜群の原経験」であり、「究極的に支える根本の経験」であり、「正しい練習において経験される解き放たれ」と同質性をもった「解き放たれ」た状態を人間に経験させることが可能なものであると定義して、この「根本経験」において人間は「内的自由」の状態に至ることが可能となると指摘する[45]。

これを踏まえてボルノーは「内的自由」を、「人間が彼の状況の諸条件と同調しているという感情」[46]であり、「（人間が）彼の諸関係と同調して生きること」[47]であると定義する。これに関してボルノーは、人間がこの世界に存在する中で置かれる生活条件とは、「ただ非常に制限された範囲においてしか影響されない」ものであり、人間がある意味自己の“自由意志”で変化を加えることができる範囲が限られたものであるが故に、“自己自身”を変革することによって周囲の諸関係に自らを明け渡しそれと「同調」することで、人間の「内的自由」が成立すると指摘する[48]。また「状況」の意味についてボルノーは、「外的および内的状況として、それに対して人間がそのつど振る舞い得る所与の全体」[49]を意味するものであり、具体的には、「外的な生活事情、つまり政治的、社会的関係への彼の依存であると同じく、その法則的連関の中で人間が彼の肉体や、彼に与えられていたり、いなかったりする素質や能力によってはめ込まれている自然への依存」[50]であり、「病気や老いや差し迫った死によって彼に痛切に思い起こさせるような依存」[51]であり、「その衝動と情熱でもって彼を威圧する彼自身の心」[52]であると提起する。それ故にボルノーにとって「自由」とは、「人間がこれらすべての依存とその強制から解放されることを意味する」[53]ものではなく、「内的自由」の概念で示される如く、人間が「その諸関係と同調して生きること」に他ならず、「内的自由」の本質も「人間とその人間を取り巻く諸関係との適合」として捉えられるものである[54]。

以上のことに基づいてボルノーは、「内的自由の一つの側面は、自己自身の活動の自由が外的事情によって制限されていないという意識に存する」[55]という言葉を提起した上で、「内的自由」が

「我意の放棄」によって可能となる状態であるということをデュルクハイムに依拠して「『大いなる生』との生き生きと経験される同調」[56]であると指摘した上で[57]、「放下」を「神が彼（人間）に要求するものに自己を全く委ねた心の状態」[58]として定義する[59]。

第二章　『練習の精神』の「放下」における「身体」と「心」の関連性について

第一節　『練習の精神』における「身」と「心」の合一（「心身一如」）の状態としての「放下」について

ボルノーにとって「放下」とは、“いま、ここ”に没頭し“瞬間を生きる”という人間存在の有する時間における「永遠性」を指し示す概念である。また“いま、ここ”に専心することで可能となる「放下」の様態は、「無我」や「根本経験」や「内的自由」としても理解されるものである。本節では『練習の精神』を手がかりにして、「放下」とは「心身合一」の様態としても捉えられるものであることを明らかにする。

第一章第二節でも見たように、ボルノーは“「人間の真の生活」である「内的自由」へと「自己自身の努力によって到達できる唯一の道」”である「練習」（の過程）を経て、「我意」が放棄され“「内的自由」が実現された状態”である「放下」に至ると指摘した。重ねてボルノーは、この「放下」の成立は、“「小さな」日常的私”が放棄され、“より大きな全体、「大いなる生」との生き生きと経験される同調”が実現されることによって可能となることであるとする。

そしてこのことは、『時へのかかわり』と同様に、未来を案じて生き急ぐのではなく、“いま、この瞬間を生きること”に専心するという「時間との同調」によって可能となることであるとボルノーが指摘したことと重なってくる。すなわちボルノーは『練習の精神』においても、「時間」とは人間にとって、「自己自身の意志に対立する他の意志ではなく、人間がその中に正しい仕方で適応すべき媒体」[60]であると提起するに至る。このことは、「練習」の過程を経て到達する「内的自由」の境地とは「放下」と同様の状態であり、それ故に「内的自由」に至った人間のあり方とは「時間に住まう」ことが可能となった状態であることへの示唆となるということである。

ところでボルノーは『練習の精神』でヘリゲルが日本で体験した弓道の稽古についての叙述に基づいて、稽古者が稽古の果てに至る“境地”における心身のあり方について解き明かそうとする。ここでボルノーは、「弓術が教えられて練習される仕方における決定的なことは、出来るだけ速やかに一定の目標に達する、つまりこの例では的の中心に当てることが問題なのでは全くない」[61]ということを指摘した上で、ヘリゲルの「射手は実は自分自身を的にし、かつその際に恐らく自分自身を射当てるに至る」[62]という言葉に依拠しながら、弓術の稽古のプロセスで稽古者に求められる重要なことは、弓を扱う技術にこなれるという身体的な技術の向上ではなくて、「弓を射る自分と射られる的が一体化する」という、日常とは異なる次元まで精神を集中させることにあると指摘する。そのことをボルノーは、「日常の放心を通り抜けて『真の生活』への突破」[63]という言葉で表現する。これと関わるボルノーの以下の重要な言葉がある。

> 「練習者のこの変化は、絶えず繰り返される言い回しで、次のように記述される。すなわち、『自分自身から離脱すること』、うろたえずに自己にとどまること、『無意図的』で『無我』になることが肝要である、と。練習者がもはや射るのではなく、『それ』が射るのだと、この事象は記述される。この経験は、練習者がそれを初めて経験したときには、彼を筆舌に尽くし難い幸福感で満たすのである。自分から的に当てようとする意志は抹消され、射手はその的と一体となり、矢はおのずからの如くに放たれて、間違いのない確実さで的に当たる。無欲がここでは成功の前提となるのである」[64]。

「至る所で肝要なのは唯一つの決定的なことである。すなわち、（主客を）分離する意識を遮断することと、成功する行為において『間髪を入れずに』（主客を）継ぎ目なく同化することである」[65]。

ここで重要なことは、“弓の的と射手が一体となる”という言葉や、稽古者がその“境地”において“主客が分離する意識が遮断”され、“主客が継ぎ目なく同化”される様態に至るという指摘からもわかるように、練習（稽古）というプロセスを経る中で、人間が「心身一如」の状態、かつ「主客合一」の状態に至るとボルノーが捉えていることである。このことと、第一章第二節において明らかとなった、「練習」のプロセスの“境地”として人間に訪れる「放下」とは、「人間がその諸関係と同調して生きること」が可能となった「内的自由」と同質性を持つものであり、「神が人間に要求するものに自己を全く委ねた心の状態」として捉えられ得るものであるということは密接につながった問題であるのではないか。これに関してボルノーは『人間と空間』で、「主客合一」の様相を呈する「住まうこと」の中に、自らの「身」に「心」が「住まう」（一如のものとして心身が結びつく）という契機が存在することを示している[66]。前掲の井上（2018）で「身体に住まう」こととは「主客合一」の様相を呈するものであり、本稿で「放下」とは「心身一如」の様相を呈するものであると提起しているが、重要なことは「身体に住まう」こととは「放下」と関連性を持つ概念であるということであり、ここから弓を射る人間と外的対象（弓・的）との間の「主客合一」の状態と、弓を射る“自分”の中での「心身一如」への変容が結びつくことへの展望が拓けてくる。これらを踏まえると「放下」とは、弓術の稽古者がその稽古の“境地”において「弓を射る自分と射られる弓、そして自分に射当てられる的と射当てようとする自分が一体化」し「主客合一」する様態であり、稽古者自身の内的な問題として「心身一如」の様態として捉えられ得る概念であるということである。更にボルノーはデュルクハイムが“練習の機能”として指摘した「主体と客体との深く幸せにする一致」[67]という言葉に依拠しながら、練習者がその“境地”において「人間が自己の根源的な真の本質へと目覚める状態」[68]に至ると補足する。

これらのことからボルノーの「放下」とは、人間が“流れさるもの”として刻々と変化する時間に「住まうこと」が可能となった様態であり、かつ、自分が置かれた諸条件と同調して生きることが可能となったという意味で、人間が“流れさるもの”としての「時間性」を克服する中で、自らの存在様式として「心身一如」となり、自らを取り巻く“時間”や場だけではなくモノを含む“空間”と「主客合一」となった人間の様態を表す概念であることが明らかとなる。

それでは「放下」とは、ボルノーが『人間と空間』において提起した「身体に住まう」ことと同質性を持った概念であると言えまいか。この解明を以下第二節で試みる。

第二節　『人間と空間』における「身体に住まう」ことと『練習の精神』における「放下」の関連性について

前掲の井上（2018）において、ボルノーが『人間と空間』において提起した「住まうこと」とは「身体に住まうこと」を意味することであり、「身体」とは「媒体」として「空間」と不可分に「合一」し重なり合うものとして存在することによって人間にこの世界に「住まうこと」を可能にするものであるということを提起する中で、ボルノーが「身体」を、一点目に「空間を経験している主体」として、二点目に「体験されている客体」として、三点目に「主」「客」が密接に関連しあっているものとして定義し、「人間」と「身体」の関係性を「所有する者」としての「主」と「所有されるモノ」としての「客」が分化した関係に回収されないものであると捉えていることが明らかとなった。更にボルノーがメルロ＝ポンティに依

拠して、「住まうこと」が可能となるためには、「人間が身体に受肉する」（「心が身体に住まう」）ことが必要不可欠であり、「身体」とは「心」が「住まう」ための「郷土空間」であり、それ故に「身体」と「心」の関係性とは、「人間」が「空間」に対して取り持つ「わかちがたい統一」の「母型」となると捉えていることも明らかとなった。

上記のことを踏まえて、“「心身一如」となり、「主客合一」となった人間の様態を表す概念である「放下」とは、『人間と空間』において提起された「身体に住まう」ことと同質性を持つ概念であるということについての解明を試みる”という本節で更に注目すべき点は、ボルノーが『人間と空間』において“「人間」と「身体」の関係性を「所有する者」としての「主」と「所有されるモノ」としての「客」が分化した関係に回収されないものであると指摘している”点である。

これに関して注目すべき点は、ボルノーが“「客体性」や「異質性」の打破”という意味で「非空間（ein Unraum）」や「零点（der Nullpunkt）」という言葉によって、「身体」とはその“もちぬし”である人間にとって「目だたないもの」や「意識されないもの」という特性を有するものであると提起していることである。これに関してボルノーは以下のように指摘する。

「素朴な意識にとっては、身体はまた固有の空間を占めることなどまったくなく、空間は身体の彼岸から、つまり皮膚の外側からはじめてはじまっている。身体はまったく手もとにないような、いわば一つの『非空間（ein Unraum）』であり、すべての空間的隔たりの始まりにすぎない。身体は、空間のなかのすべての間隔の体系にとって点、それも零点（der Nullpunkt）の機能しかもたない。身体はそれ自身いわば一つの点にまで収縮してしまっているのである」[69]。

ここでボルノーは、「身体」とは人間にとって“所有する”ものとして意識上にのぼらないほど密接に結びついた存在であると提起し、その意味で「身体」を「非空間」として定義する。このことをボルノーは、人間が「（普段は）自分の身体を越えて、自分が関わっている、自らの世界の出来事（事象）のもとに直接的に参入している」というあり方をしているということや、それ故に「身体」が“もちぬし”である人間に意識されないほどに一体化したものとして認識されていることから、「身体」とは人間にとって「点」すなわち「零点」として存在するものであると指摘する。

“意識されないほどに一体化したもの”として「身体」を描き出すことに関連してボルノーは、「非空間」や「零点」の性質を「受肉（die Inkarnation）」[70]の概念に繋げて論じる。この「受肉」についてボルノーは、「人間が身体を所有する仕方」として提起し、“「人間は、自分の身体とは何らかの仕方でもっと密接にむすびついている」[71]ので、「人間は自分の身体をその他の所有物を所有するような仕方で『所有』して」[72]”おらず、「身体は、生き生きと使用しているときにはつねにすでにわが物なのであり、すでにその人格のなかに組み入れられている」[73]という言葉によって、その様態を説明する。ここで重要なことは、この指摘によってボルノーが、“日常性の中での身体”である「通常意識されない」レベルにおける身体を「非空間」・「零点」という概念で表して、日常を超越した「心身一如」の状態である「受肉」の様態としての身体に至るための“通路”として捉えていることである。このことは、『人間と空間』（第五章第二節の２）において、ボルノーが「非空間」・「零点」を「受肉」に至る契機として提起している所にも表れている[74]。

以上のことから、『人間と空間』において提起された“「身」と「心」の結びつき”という意味での「非空間」や「零点」の概念は、第一章第二節で見たように、『練習の精神』において「放下」との関わりの中で明らかとなる「内的自由」の状態として指摘されたことと同質性を有することであるということが指摘できまいか。すなわち「放下」とは、「人間がその諸関係と同調して生きること」を可能にする様態である。そしてそれは何

よりも、「放下」とは、「身」と「心」が「一如」のものとして結びついたことで可能となる様態であるということである。これはボルノーが『練習の精神』において「放下」を、練習者の身体がその練習の“境地”において達する「我意」の放棄による「内的自由」が実現された状態として提起したところにも表れている。

すなわちボルノーにとって「身体」とは、“もちぬし”である人間と「主客合一」し「心身一如」が実現された“境地”において、「非空間」や「零点」という概念によっても捉えられ得るものである。そして「身体」に着目することで「放下」と「身体に住まう」ことの同質性が明らかとなることからも、ボルノーの教育人間学の核となる概念の本質を捉えるためには「身体性」の契機に着目することが必要不可欠であることがわかる。

結章　『練習の精神』における「放下」を軸としたボルノー教育人間学における「身体性」の契機について

ボルノーの人間理解の根底には「身体性」の契機が存在しており、それ故にボルノーの教育人間学の特質を理解するためには、そこにおける「身体性」の契機を読みとることが重要であるという視点に基づいて、“ボルノーの「身体」理解”とは“ボルノーの「人間」理解”であるということを明らかにするための鍵を“ボルノーにとって「身体」と「心」の関係性が如何なるものとして捉えられているのか”という問いに見出し、これに『練習の精神』における「放下」の概念を軸としてアプローチした。

その中で、『人間と空間』においてボルノーが「住まうこと」の根幹として「身体に住まう」ことを提起したように、『練習の精神』において、ボルノーが練習という身体的行為を通して人間が到達すべき（本来あるべき）心のあり方について解き明かそうとする中で、練習者が練習のプロセスの中で、全くその行為に没頭しその果てに至る“境地”において、“その瞬間に「住まう」こと（「時間に住まう」というあり方）が可能となる”という“充実の状態として「放下」の状態が実現すること”、すなわち、“「身体」と「心」が「心身一如」の状態で結びつくこと”が可能となると捉えていることが明らかとなった。

このことから、「内的自由」と「放下」と「身体に住まう」ことは「心身一如」の様相として同様の性質を持つものであるということへの展望と、「時間・空間に住まう」というあり方は、人間が“その瞬間、その場所に受け容れられて存在することが可能となる”ということから、「主客合一」の様相を呈する概念であると提起することへの展望が拓ける。

本稿では、ボルノーの教育人間学の根幹を捉える上で必要不可欠な契機として「身体性」に着目し、「心身一如」として捉えられ得る「身体に住まうこと」と「放下」の同質性の解明を目標として掲げたが、両者の特質とその繋がりについて更に掘り下げるためには、例えば『気分の本質』において指摘された“「幸福な気分」の中で体験される出来事”のように、“人間が通常置かれている限りあるものとしての「時間」・「空間」を超える体験”とは如何なる体験であるのかについて解明することが重要である。今後の課題としては、ボルノーの教育人間学の特質を捉える契機として「身体性」に着目するにあたり、「身」と密接に結びつく人間の「心」的側面にも注目する観点から、ボルノーの「気分論」である『気分の本質』（*Das Wesen der Stimmungen*）や「雰囲気論」である『教育的雰囲気』（*Die Pädagogische Atmosphäre*）からも、「身体に住まう」とは如何なることかということを解き明かすために、ボルノーの人間理解としての「身と心の関係性」とは何かという問題にアプローチしていきたい。

註

1　拙稿（2018）「O.F. ボルノー『人間と空間』における「住まうこと」の根幹としての「身体性」の契機について」『白梅学園大学・短期大学紀要』（54）、1-18頁。

2　岡本英明「監訳者あとがき」（O.F. ボルノウ、岡本英明監訳（2009）『練習の精神―教授法上の基本的経験への再考―』北樹出版、218頁）や中野（2010）（中野優子（2010）「図書紹介 O.F. ボルノウ著　岡本英明監訳『練習の精神―教授法上の基本的経験への再考―』」『教育哲学研究』（101）、254-259頁）においても同様の指摘がある。

3　O.F. ボルノー、H.-P. ゲベラー・H.-U. レッシング編、石橋哲成訳（1991）『思索と生涯を語る』玉川大学出版部、119頁。
日本におけるボルノー研究の第一人者である岡本英明も、本書を「後期ボルノウの思想を代表する著書の一つ」であると指摘している（O.F. ボルノウ、岡本英明監訳（2009）『練習の精神―教授法上の基本的経験への再考―』北樹出版、216頁（「監訳者あとがき」））。

4　『思索と生涯を語る』、119頁。

5　Bollnow,O.F.（2017）*Vom Geist des Übens. Eine Rückbesinnung auf elementare didaktische Erfahrungen,* 9. Bd. Königshausen & Neumann, Würzburg, 2017, S.268.
（Drucknachweis Freiburg im Breisgau/Basel/Wien 1978; 2. Durchges. U. erw. Aufl. Oberwil bei Zug 1987; 3. Durchges. U. erw. Aufl. Stäfa 1991）
（O.F. ボルノウ、岡本英明監訳（2009）『練習の精神―教授法上の基本的経験への再考―』北樹出版、15頁。）

6　*Ibid*., S.267.（同上、13頁。）

7　*Ibid*., S.267.（同上、14頁。）

8　*Ibid*., S.267.（同上、14頁。）

9　『思索と生涯を語る』、119頁。

10　同上、119頁。

11　この点に関して島田（2009）も、『練習の精神』を教育学分野の書としてのみ捉えられるものではなく、「比較思想、比較文化の範疇」にある書としても捉えられるものであると指摘する。（島田燁子（2009）「比較思想研究の動向　O.F. ボルノウ（岡本英明監訳）『練習の精神―教授法上の基本的経験の再考―』」『比較思想研究』（36）、125-127頁。）

12　桐田清秀（1985）「練習と稽古――ボルノウの「練習の精神について」によせて」『花園大学研究紀要』（16）、1-22頁。

13　広岡義之（2010）「ボルノーにおける「練習の精神」の教育学的一考察」『兵庫大学論集』（15）、101-110頁。

14　光田尚美（2013）「道徳教育における身体性の問題：ペスタロッチーの「道徳的基礎陶冶」における「行為の練習」の意味」『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』16（2）、29-37頁。

15　井谷信彦（2012）「O.F. ボルノウ『練習の精神』とメビウスの輪」『教育学研究論集（武庫川女子大学）』（7）、7-19頁。
井谷信彦（2013）『存在論と宙吊りの教育学――ボルノウ教育学再考』京都大学学術出版会。

16　O.F. ボルノー、浜田正秀他訳（1973）『O.F. ボルノー講演集　対話への教育』玉川大学出版部、36-37頁。

17　「放下」は他に、「落ち着き」や「沈着」などの訳がある。

18　Bollnow,O.F.（1972）*Das Verhältnis zur Zeit. Ein Beitrag zur pädagogischen Anthropologie,*
Quelle & Meyer, Heidelberg, S.18.
（O.F. ボルノー、森田孝訳（1975）『時へのかかわり』川島書店、28頁。）

19　*Ibid*., S.18.（同上、28頁。）

20　*Ibid*., S.13.（同上、19頁。）

21　*Ibid*., S.13.（同上、20頁。）

22 *Ibid*., S.13.（同上、19頁。）
23 *Ibid*., S.18.（同上、28頁。）
24 このことは、前掲した井谷の、ボルノーにとって「放下」とは、「我意を離れ去って、信頼を抱きながら、干渉してくる出来事へと身を委ねた」状態のことであり、“「実用上の取り扱いのような単純な図式主義に邪魔されることなく、現実性の充実を受け止めること」”であり、“「有用性の志向の制約から解き放たれて、諸事物を固有の存在において」捉えること”である「直観」を獲得する前提となるものであるという指摘と合致するものである。
25 Bollnow, *Vom Geist des Übens*, S.327.（『練習の精神』、127頁。）
26 ヘリゲルやデュルクハイムなど、ボルノーは『練習の精神』において、ドイツの哲学者の日本の禅文化に基づく身体思想についての書を自身の議論を支える基盤として用いている。
27 Bollnow, *Vom Geist des Übens*, S.313.（『練習の精神』、100頁。）
28 *Ibid*., S.313.（同上、100頁。）
29 *Ibid*., S.313.（同上、100頁。）
30 *Ibid*., S.313.（同上、100頁。）
31 *Ibid*., S.313.（同上、100頁。）
32 *Ibid*., S.313.（同上、102頁。）
33 *Ibid*., S.314.（同上、102頁。）
34 *Ibid*., S.327.（同上、127頁。）
35 *Ibid*., S.327.（同上、127頁。）
36 *Ibid*., S.327.（同上、127頁。）
37 *Ibid*., S.327.（同上、127頁。）
38 *Ibid*., S.327.（同上、127頁。）
39 *Ibid*., S.328.（同上、129頁。）
40 *Ibid*., S.328.（同上、129頁。）
41 *Ibid*., S.328.（同上、130頁。）
42 *Ibid*., S.328.（同上、130頁。）
43 *Ibid*., S.328.（同上、130頁。）
44 Bollnow, *Ibid*., S.329.（同上、131頁。）
Kamlar,W.(1949) *Der Mensch in der Profanität*, W.Kohlhammer, Stuttgart, S.19-29.
Kamlar,W.(1973) *Philosophische Anthropologie*, B.I-Wissenschaftsverlag, Mannheim, S.158.
45 Bollnow, *Ibid*., S.329.（同上、131-132頁。）
46 *Ibid*., S.332.（同上、137頁。）
47 *Ibid*., S.332.（同上、137頁。）
48 *Ibid*., S.332-333.（同上、137-138頁。）
49 *Ibid*., S.332.（同上、137頁。）
50 *Ibid*., S.332.（同上、137頁。）
51 *Ibid*., S.332.（同上、137頁。）
52 *Ibid*., S.332.（同上、137頁。）
53 *Ibid*., S.332.（同上、137頁。）
54 *Ibid*., S.333.（同上、138頁。）
55 *Ibid*., S.333.（同上、139頁。）
56 *Ibid*., S.334.（同上、140頁。）
57 *Ibid*., S.334.（同上、140頁。）
58 *Ibid*., S.334.（同上、140頁。）
59 *Ibid*., S.334.（同上、140頁。）
60 *Ibid*., S.334-335.（同上、141頁。）
61 *Ibid*., S.318.（同上、109頁。）
62 Bollnow, *Ibid*., S.318.（同上、110頁。）
Herrigel,E.(2011) *Zen in der Kunst des Bogenschießens,* O.W.Barth Verlag, München（Neuausgabe）, S.11.
63 Bollnow, *Ibid*., S.318.（同上、110頁。）
64 Bollnow, *Ibid*., S.319.（同上、111頁。）
Herrigel, *Ibid*., S.40, 41, 43, 55, 59 u.a.
Herrigel, *Ibid*., S.46.
Herrigel, *Ibid*., S.47, 63, 64, 65, 76, 88 u.a.
Herrigel, *Ibid*., S.76.
65 Bollnow, *Ibid*., S.321.（同上、114頁。）
66 Bollnow,O.F.（2011）*Mensch und Raum,* 6. Bd. Königshausen & Neumann, Würzburg, S.234.
（Drucknachweis 1.Aufl. Stuttgart 1963; 7.Aufl. Stuttgart/Berlin/Köln 1994）

（オットー・フリードリッヒ・ボルノウ、大塚恵一・池川健司・中村浩平訳『人間と空間』せりか書房、1978年、271頁。）

67 Bollnow, *Vom Geist des Übens,* S.323.（『練習の精神』、117頁。）

68 *Ibid*., S.323.（同上、117頁。）

69 Bollnow, *Mensch und Raum*, S.235-236.（『人間と空間』、273頁。）

70 *Ibid*., S.227.（同上、263頁。）

71 *Ibid*., S.237.（同上、273頁。）

72 *Ibid*., S.237.（同上、273頁。）

73 *Ibid*., S.237.（同上、274頁。）

74 *Ibid*., S.235-238.（同上、272-275頁。）